

【訳注】

「徐霞客遊記」訳注稿 名山遊記篇（一）——「遊天台山日記」

薄井俊二

はじめに

本稿は、明末の徐宏祖（一五八六〜一六四一年）による「徐霞客遊記」の訳注を試みたものである。

徐宏祖（あるいは弘祖）は、江蘇省江陰県の人で、字は振之、号は霞客。地方の名門の出であったが科挙は受けず、白衣で終わったが、黃道周などの名士と交わった。幼より經学を好まず、地理書に読みふけたという。

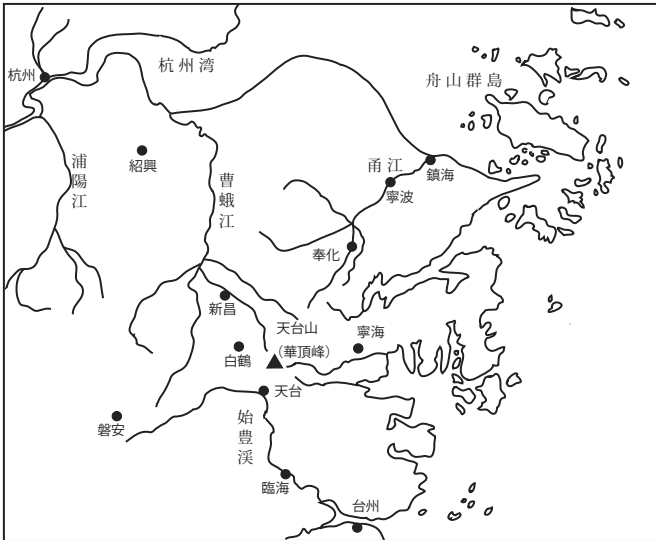
彼の旅行記録として「徐霞客遊記」全十巻、およそ六十万字程が残る。これは後人の編纂によるもので、原文のいくらかは失われたようである。そのうち第一巻は、一六一三年から一六三三年に至る、九回に及ぶ中国の名山を踏破した旅行の記録で、「名山遊記」と呼ばれる。

今回はその中から、一六一三年の天台山への遊記を訳出した。紙幅の関係で、口語訳と語注のみとする。

徐霞客の自注は「」で示す。

底本は、褚紹唐・呉王寿整理の上海古籍出版社本（一九八〇年）とし、諸書を参考にした（巻末参考文献参照）。

掲載の地図1は稿者が作成したもので、地図2は丁文江撰『徐霞客遊記』の付図を加工したものである。



地図 1

遊天台山日記〔浙江台州府〕

癸丑の年、三月三十日

寧海県を西門から出発する。雲もなく晴れ渡り太陽が輝き、人の心情も山の姿も、喜んでいくかの如くである。三十里進むと梁隍山に至った。聞くところによれば、この地では虎が跋扈しており、月ごとに数十人に被害を与えているという。そこでここに宿泊することとする。

○癸丑 万曆四十一年、西曆一六一三年にあたる。徐霞客二十八歳。

○寧海県―浙江省寧海県。 ○梁隍山―梁皇山とも。主峰は海

抜七六八メートル。南朝の梁末に陳霸先が攻められて昭明太子がこの地に逃げ込んだことがその名の由来だとされる。 ○虎―原

文は於菟。

四月一日

朝は雨。十五里進むと分かれ道がある。馬首を西に向け天台山へ向かう。空が次第に晴れてくる。

また十里進むと、松門嶺に至る。山道は峻険で路面は滑りやすい。そこで馬から下りて歩くことにする。奉化よりこのかた、幾重もの山道を越えてきたが、どれも山麓をめぐるのであった。それがこの地に至って、迂回したり、谷川に臨んだり高い所に登ったりすることになってきた。すべて山の尾根である。

雨が上がったばかりで晴れ渡り、美しい山の景色の中に溪流の音が聞こえ、繰り返す新しい景勝が出現する。緑の草むらの中に杜鵑花が赤く映えており、山に登る苦しさを忘れさせてくれる光景である。

また十五里進む、筋竹庵で昼食とする。山頂ではあちこちで麦を植えている。筋竹嶺より南に行けば、国清寺へ向かう大路である。たまたま国清寺の僧侶で雲峯というものと食事をもとにすることになる。彼が言うには「ここから石梁に至るには、山道は険しく、且つ長い。荷物を携帯していくのは大変であり、軽装で行き、重い荷物は（人に運ばせて）国清寺で待たせているのがよい」と。私はその意見に同意し、担夫に雲峯とともに国清寺に行かせ、自分は蓮舟上人とともに石梁への道をたどることとする。

五里進むと筋竹嶺を過ぎる。嶺の旁らには背の低い松の木が多い。年を経た幹は屈曲し、根の辺りは葉が青々と茂っている。まるで下界の我が家にある盆栽のようだ。

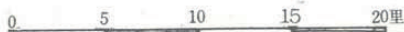
また三十里進むと弥陀庵に至る。上下ともに高峻な山嶺であり、奥深い山で荒涼としている（虎が隠れるのを恐れて、草木を焼き払っているであろう）。溪流の音が鳴り響き、強風が大地を揺るがしており、山道を行く人は他にはいない。弥陀庵は重なる山々の中の平地にある。これからの道は厳しくかつ長い。またちようと道程の半ばにあたる。ここで食事にして宿をとるのがよい。

○松門嶺―寧海県の西端にあるとうげ道。 ○奉化県―浙江省寧波に属した。 ○杜鵑花―原文は山鵑紅。春に赤い花をつける観

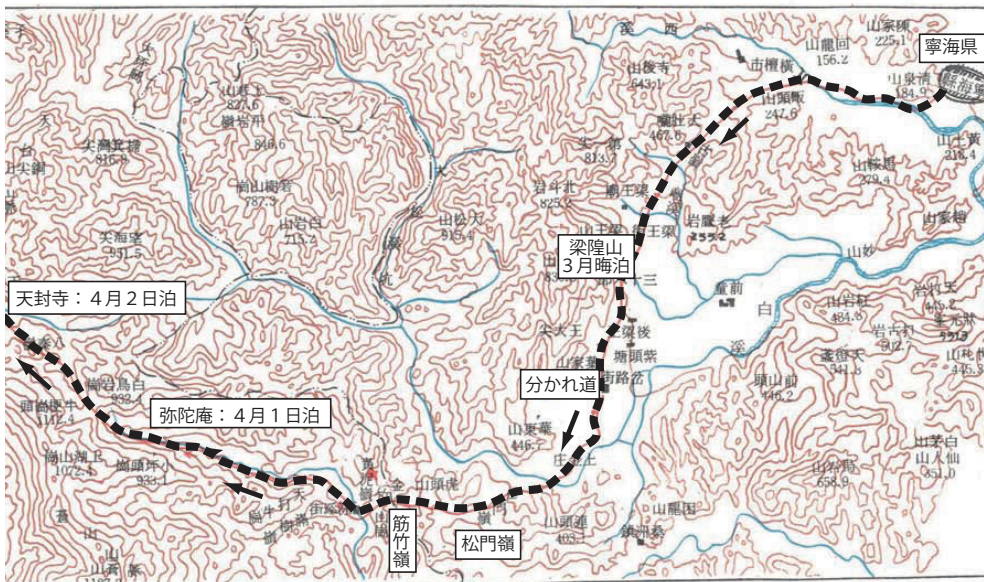
遊天台山日記行程 (第一回)：3月晦~4月8日

圖 山 台 天

一之分萬十二尺縮



達米百一離距線高等

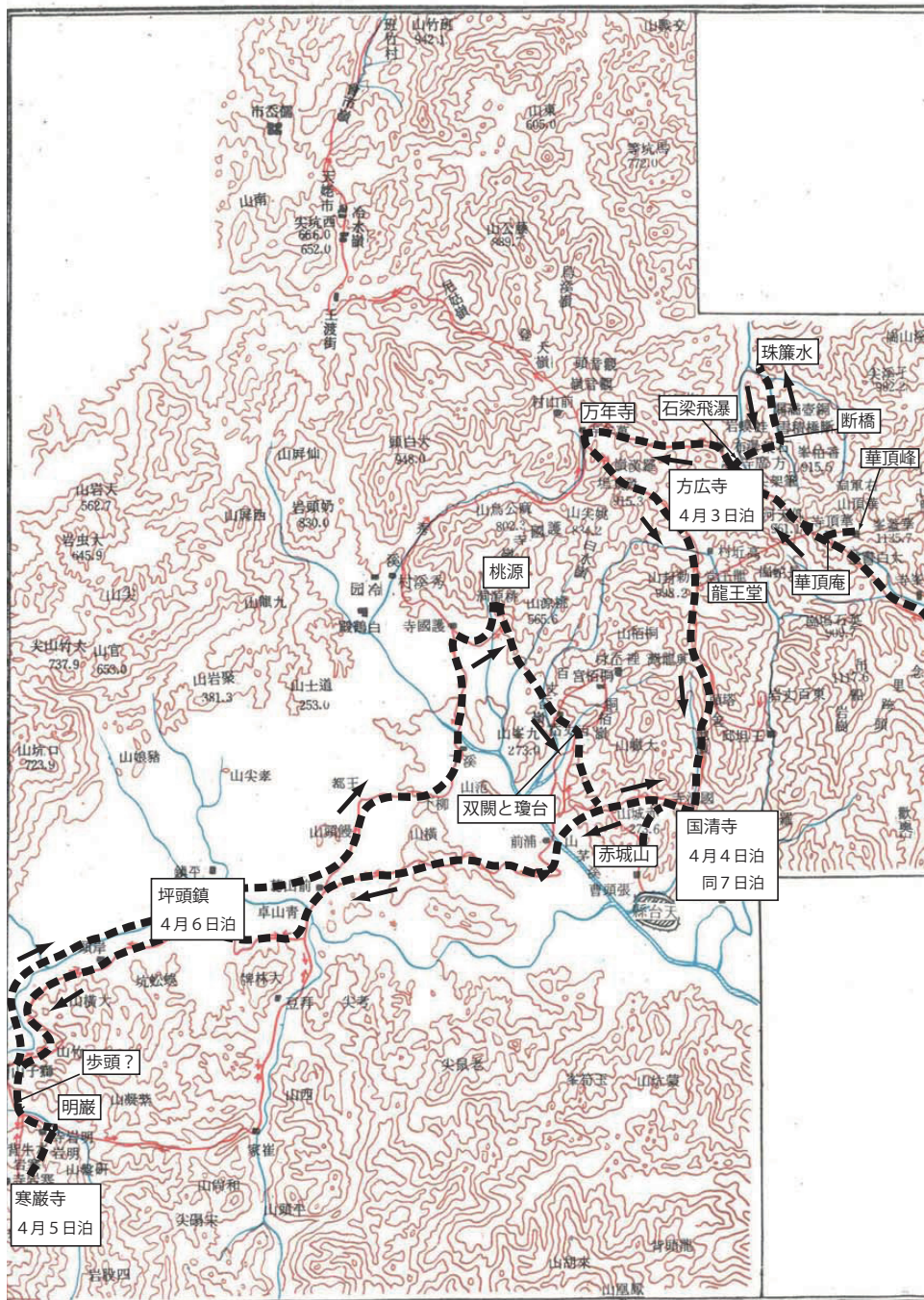


例 圖

界縣	宇廟	鎮村	治縣
2136	脈山	流河	路道旅行

圖準此
向用箭頭表示他
均用紅線旅行方
凡游記旅行道路
聞齊編製
民國十三年八月

地圖 2



賞植物。 ○筋竹庵—筋竹嶺にあった庵なのだろう。 ○筋竹嶺

—寧海県と天台県との境をなすとうげ道。金竹嶺・金嶺ともいう。

筋竹(越王竹)を産したのが名の由来という。 ○南に行けば云々

—ここから西南に山を下ると大溪に出、天台県城を經由して国清寺に至る道となる。そのまま西へ進めば天封寺を經由して華頂峯に至る道となる。 ○石梁—いわゆる「石梁飛瀑」。天台山中にある景勝のひとつ。 ○蓮舟上人—徐霞客と同郷の人で、この旅行で同行していた。 ○下界の我が家—原文は閩門。これは蘇州

都城の門のひとつで、蘇州そのものを表すが、それでは意味が通じにくい。天台山中から見た下界を代表させているものと解した。 ○弥陀庵—仏者の庵があったのだろう。 ○山々の中の平地—

原文は坳。

四月二日

朝食を終えると、雨がやむ。そこで道を蔽う水たまりを越え、山嶺をよじ登る。溪流と岩石とが次第に薄暗くなっていく。

二十里進み、夕暮れに天封寺に至る。寢床で、明朝の山頂への登攀のことを思いやり、縁があつて、晴れの天気にならないかと考える。というのも連日夜になってようやく晴れており、朝から晴れることはついぞなかったからだ。五更に夢うつつの中で、満天に星が出ているとの話し声を聞く。うれしくなつて眠れなくなる。

○天封寺—華頂峰の南にある智者大師が開いた寺院。今その名を冠した小村がある。 ○峯頂—華頂峯の頂上。 ○五更—おおむね午前四時前後。

四月三日

早朝に起きる。果たして太陽が燦々と輝いている。そこで華頂峰の頂に登ることに決める。

数里登ると華頂庵に至る。更に三里行くと、山頂近くに太白堂がある。どちらも鑑賞に足るものは何もない。しかし次の話を聞く、「太白堂の左の下に黄経洞という洞窟がある」と。そこで小道を下つてみる。

二里行くと、下にひとつの大きな岩が突出しているのが見える。とても美しいと感じた。ところがそこへ至ると、一人の有髪の僧侶が洞窟の前に庵を結んでおり、洞窟から風が吹いてくるのを避けるために、石ころで洞窟の門を塞いでいる。誠に残念に思った。

再び登ることにし、太白堂を経て、山道に順つて華頂峰の山頂に登る。山頂は荒れた草地で風に吹かれて草がなびいている。山の標高が高く風は寒冷で、草の上には霜が一寸ばかりもおりている。周囲を見下ろすと山々が四周に展開しており、宝玉のように美しい花々や木々が、細やかに目の限りに広がっている。山麓では花が盛んに咲いているのに、山頂では花が開いていない。山が高く寒冷なためであろう。

元の道をたどつて華頂庵に下る。池の畔の小さな橋を過ぎて、さらに嶺を三つ越える。谷川がめぐり山々が重なり、木々が生い茂り岩石が美しく輝いている。一箇所をめぐると新らしい奇景が展開し、まったく望むところを満足させる。

二十里行き、上方広寺を經由して石梁飛瀑に至る。曇花亭で仏を礼拝する。子細に飛瀑を鑑賞する暇も無く、下つて下方広

寺に至り、そこから石梁飛瀑を仰ぎ見る。たちまち天の果てに
いるかのようである。

「断橋と珠簾が最も優れた景勝だ。」と聞く。僧侶が「昼食後
でも往復できる。」と言う。そこで仙筏橋から山の後に向かい、
嶺を一つ越える。

溪流に沿って八九里行くと、滝が石の門のようなところから
流れ落ち、ぐるぐるとめぐって三段をなしている。一番上の段
が断橋である。二つの石が斜めにもたれかかっている。滝の水
がその石の間に砕け散ってほとぼしり、またひとつに合わさつ
て淵に入る。真ん中の段は二つの石が門のように対峙している。
滝の水は門のために束ねられ、勢いが甚だ激しい。最下段は淵
の口がとても広い。水が注いでいるところは門の敷居のようで、
水が窪みから斜めに下っている。三段の滝はいずれも高さが数
丈あり、それぞれが神奇を尽くしている。しかし流れは段々に
下っており、湾曲したところは滝に遮られており、全部を一度
目に収めることはできない。

また一里ばかりで珠簾水がある。水が流れて下るところは平
らで広々としており、水勢はゆったりとしていて、蕩々と水音
を立てて流れている。私は足をむき出しにして草むらを跳ね、
木につかまって崖を登った。しかし蓮舟君はついてこれなかつ
た。夜のとばりがあたり立ちこめてきて、ようやく還る。

仙筏橋に足を留め、石梁が虹のように掛かり、飛瀑が雪のよ
うな飛沫を吹き上げているのを眺める。まったく睡るのが惜し
いくらいだ。

○華頂峯—天台山の最高峰。標高一三三八メートル。 ○華頂庵

—今華頂峯には華頂寺がある。その前身か。 ○太白堂—李白が
読書をしたといわれ、後人が堂を立てたらしい。 ○黄経洞—王

羲之が白雲先生のために「黄庭経」を書写し、それを蔵していた
と伝える。 ○宝玉のように美しい花々や木々—原文は琪花玉树。

孫綽「遊天台山賦」に「建木滅景於千尋、琪樹璀璨而垂珠」とあ

るなど、天台山を形容する際の常套語。 ○上方広—下方広—石

梁飛瀑の周囲には方広寺という寺院があったが、上流から上方広

寺・中方広寺・下方広寺の三つがあった。現在は上方広寺は焼失

して存在しない。 ○曇花亭—未詳。中方広寺あたりにあった施

設であろう。 ○断橋—石梁より上流にあった自然の橋。 ○珠簾

—断橋より更に上流にあった滝。 ○仙筏橋—未詳。

四月四日

天空も山々も黛のごとく青緑に輝いている。朝食をとる時間
も惜しんで、すぐさま仙筏橋に沿って曇花亭に登る。石梁飛瀑
は曇花亭の外になる。梁は広さが一尺あまり、長さが三丈あま
りで、兩岸のくぼみの所に架かっている。二筋の滝が亭の左か
ら流れてきて、橋（石梁）に至って合流し、下へ流れ落ちてい
る。雷や河が決壊するかのような轟音が鳴り響いている。滝の
高さは百丈を下らない。

私は石梁の上を歩いてみて、深い淵を見下ろしたところ、ぞつ
として鳥肌が立つほど慄然たる思いであった。石梁を渡り終え
ると向こう側に大きな石が聳えていて、向かいの岸に登ること
はできない。そこで引き返した。

曇花亭を通り過ぎ、上方広寺に入る。寺の前を流れる溪流を

さかのぼれば、さきほど隔壁となっていた大きな石の上に出る。そこに座つて石梁を眺める。下方広寺の僧侶が食事促すために声をかけてくれるまで、ずっと眺めていた。

昼食後、十五里進んで万年寺に至る。藏経閣に登る。閣は二屋で、南北経の両方を蔵している。寺の前後には杉の古木が多くあり、三抱えほどの太さがある。鶴が巢を懸けており、美しく清らかな鳴き声を聞かせている。これもまた深山における雅やかな響きである。

この日私は、桐柏宮に向かい、さらに瓊台や双闕といった景勝を尋ねたいと思っていた。しかし、分かれ道が多く、迷いそうになったため、そのまま国清寺に向かうこととした。国清寺は万年寺から四十里ほどで、中程で龍王堂というところを通過する。嶺を一つ下るたびに、私はもう平地に着いたのかと思つたが、その下に更に幾重もの嶺があつて、下りの勢いは中々やまない。そこでつくづく実感した、華頂峰の高さと言へば、天からさほど遠くないのだ、と。

日が暮れて国清寺に到着した。雲峰和尚と再会したが、あたかも久方ぶりに会うかのような気がした。これからの奇勝の探訪について相談する。雲峰和尚が言うには「天台山の名勝では、寒岩と明岩に及ぶものはない。遠いところにあるが、馬に乗つていけばいい。先ず寒岩・明岩を見て、後に歩いて桃源に至り、そこから桐柏宮に至るルートを取れば、碧壁や赤城も一望にすることができると。」

○万年寺—禅宗の寺で現存。榮西なども修行した古刹。 ○藏経閣—明の万曆十五年（一五八七年）に李太后が寄贈したという。

○桐柏宮—鳴柏觀とも呼ばれる道觀で現存。王子晋や葛玄に關わるといわれるが仮託。文献上確認できるのは、唐睿宗の景雲二年（七一二）に、司馬承禎のために重建されたこと。天台山道教の中心。 ○瓊台—後述。 ○双闕—後述。 ○龍王堂—今の石梁鎮。 ○国清寺—天台教学發祥の地。煬帝が天台大師智顛のために創建。天台县城から天台山へ入る入り口に位置し、山麓型の

滞在型の寺院である。最澄や円珍などの日本僧も多く訪れた。

○両巖—天台县城の西にあつた寒岩と明岩。 ○桃源—後述。

○赤城—後述。

四月五日

雨模様であるが、気にせずに出かける。寒巖・明巖に至る道をたどる。国清寺の西門で乗る馬を求める。馬がやつてきたが、同時に雨も降り出す。

五十里進み歩頭に至ると雨がやむ。馬も返す。

二里進み、山に入る。周囲をめぐる峯々が溪流に映えており、樹木が生い茂り奇岩が重なっている。とても心地よい。東陽県から一筋の溪流が流れてきているが、水勢がはなはだ急で、川幅（流量）は曹娥江に匹敵するほどである。辺りを見渡したが渡してくれる筏もなく、従僕に背負われて渡る。深さは膝ほどである。渡りきるのにほとんど一時を要する。

三里進むと、明巖に至る。明巖は寒山と拾得が隠棲したところ、二つの山が曲がっている。《大明一統志》にいう「八寸関」である。関に入ると、四周に崖が城壁のように切り立っている。最も奥に、数百人が入れるほどの深さ數十丈もの洞窟がある。

洞窟の外の左には、二つの巖があり、どちらも石の壁の半ばにめりこんでいる。洞窟の右には石筍が突き立つように聳えている。その先端は石壁と同じ高さまでなり、一筋の線ほどしか離れていない。石筍の上には青い松や紫の花が盛んに茂っており、左側の両巖と相対しているかのごとくである。誠に奇勝であるといえよう。

八寸関を出て、再び岩山を上ると、左にまがる。初め来た時に、下から仰ぎ見たときは、わずかな隙間程度しかないように見えたが、実際に登ってみると、数百人も人数を収容できる広さがあることに気づく。巖の中に井戸がひとつある。仙人井という。浅いがつきることはない。明巖の外にまた大きな岩塊がある。高さは数十丈、高く聳える様が（上の部分が二つに割れていることから）二人の人間が立っているかのようなのである。僧侶たちは、指さして「寒山と拾得だ」という。

寺（寒巖寺）に入る。夕食後雲が晴れ、新月が天に昇る。めぐらせた崖の頂上にあつて、月に向かえば、美しい光が岩壁にあふれている。

○寒巖—天台县城の西南にあり、寒山が隠棲していたと伝える。

○明巖—寒巖に隣接する山。 ○桃源—後述。 ○護国寺—後述。

○歩頭—寒巖・明巖の西北麓の小鎮。 ○東陽—県。金華府に属す。

今の浙江省東陽県。この溪流は始豊溪。 ○曹娥江—天台山から

北流し、杭州湾に注ぐ。 ○寒山・拾得—唐代の詩僧。

四月六日

早朝に寺を出発する。

六七里進むと寒巖に至る。石が壁のように垂直に切り立っている様は、あたかも刀で切り取ったかのようなのである。振り仰いで高い所を見ると、洞窟がとても多い。巖の半ばに一つ洞窟があり、広さは三十歩、深さは百歩余りもあり、洞内も平らで広々として明るい。巖に沿って右に進み、岩の狭い小径を上に登る。巖の低くなつた窪地に二つの石が向かい合つて聳えている。下の部分は分かれているのに、上の方でつながっている。これがあの「鵲橋」である。この滝は、あの方広寺附近の石梁飛瀑と奇を争う名勝であるが、ただ、瀑布がまっすぐ落ちていた点が、やや魅力を欠く。

引き返し、僧侶の宿舎で昼食をとる。

のち筏を求めて溪流を下ることとし、谷川に沿って山の下を進む。この一帯は、切り立った壁のような険しい崖が続いており、草木がその上にはびこつて垂れている。海棠樹や紫荊藤が多く、その翠が溪流に美しく映り、香しい風が吹き寄せるところでは、玉蘭花や香草がどこにでも広がつて、絶えることがない。

一つの山の突端に至ると、石の壁が溪流の底から直立している。川は深く流れは速く、しかも川岸に通れる余地はほとんどない。岩壁の上に穴をあけ、そこを行くのだが、穴は僅かに足の半分しかない。岩壁に張り付くようにして通るのだが、魂魄を多いに恐ろしがらせるものである。

寒巖より十五里進むと、歩頭に至る。（往路とは異なり）小道を通つて桃源へ向かう。桃源は護国寺のそばにある（はずである。しかし）。護国寺の廟宇は既に廃棄されており、土地の

人でも知る人はいない。雲峯和尚に従って草ぼうぼうの曲がりくねった道を推し進むが、太陽は沈み、宿とするところもない。かくしてまたも道を尋ね、ようやく坪頭潭というところに至る。潭は歩頭より僅かに二十里なのだが、今回は小道を通つたがため、迂回することになって三十里あまりの道のりだった。ここで宿す。桃源は訪れようとする人を惑わすというのは、本当のことだった。

○桃源―谷。唐代までは注目されていなかったが、のちに劉晨阮肇の遇仙説話と結びつき、桃源の名を冠せられた。○護国寺―五代後周創建。現在でも地名が残るが、徐霞客によれば、当時施設は湮滅していたようである。○坪頭潭―いまの平鎮か。

四月七日

坪頭潭を出発し、曲がりくねった山路を行くこと三十里余り、溪流を渡って山に入る。

さらにまた四く五里進むと、山の口が次第に狭くなつていく。「桃花塢」という館がある。深い淵に沿って進む。淵の水は澄み切っていて青々としており、滝の水が上から注ぎ込んでいる。鳴玉澗という場所である。澗の水は山沿いに流れて行き、人はその澗に沿って進む。澗の兩岸の山は全てむき出しの岩石で、重なる山並みは随所に緑の木々を擁している。目に見えるものは全て觀賞に堪えるものであり、そのすばらしさは、おおよそ寒巖・明巖に匹敵するほどである。澗が行き詰まると道もなくなる。一条の滝が山のくぼみから流れ落ちており、水勢は縦横無尽である。

昼食後、館を出発し、山の窪地に沿って東南へ進み、二座の山嶺を越える。有名な「瓊台」「双闕」を尋ねようとするが、どこにあるのか知る人がいない。

さらに数里進み（人に尋ねたところ）、その山頂にあることが分かる。雲峯とともに山道をよじ登り、ようやくその山頂に到達する。下を俯瞰すれば切り立った崖が四面を囲んでおり、まったく桃源郷のような風景である。しかし緑なす岩壁が万丈も続く様は桃源郷を上回っている。山峰の頂上部分が真ん中から裂けて分かれているところがある。これが双闕である。双闕に向かい合つてぐるつと囲まれているものがある、これが瓊台である。台は三面が絶壁で、その一方はそのまま双闕につながっている。私は双闕に相對する位置におり、日が暮れてきたのでそこに登ることはできない。しかしこの辺りの景勝については既に一日満喫した。そこで山を下り、赤城山の後を通つて国清寺にもどる。だいたい三十里の道のりである。

○桃花塢―不詳。○館―桃花塢か。○双闕―天台山中の奇勝のひとつ。ふたつの巨大な岩山が闕のように並んで聳えている。○瓊台―これも奇勝。巨大な台のような岩山。双闕に隣接する。○赤城―後述。

四月八日

国清寺を離れ、山の裏側の道を五里進んで赤城山に登る。赤城山の山頂は円形の岩盤が空に聳えており、城郭のように見え、岩石の色は微かに赤い。岩穴があるが、僧侶どもがでたらめに居を構えており、天然の景勝を台無しにしている。有名な玉京

洞・金銭池・洗腸井も、これといって見るべきものではない。

○赤城―赤城山。天台山の入り口に聳え、赤い岩石が層をなしていて、城壁のように見えることからかく言う。○玉京洞―赤城

山注の道観。○金銭池―かつて曇蘭という僧侶が、神仙から贈

られた金銭をこの池に捨てたという。○洗腸井―かつて曇猷と

いう僧侶がここで腸を洗ったという。

丁文江撰『徐霞客遊記二十卷』付図、上海商務印書館、一九二八年
褚紹唐主編『徐霞客旅行路線考察図集』中国地圖出版社、一九九一年

●参考文献

●訳注

徐兆奎注釈『徐霞客名山遊記選注』中国旅遊出版社、一八五二年

朱惠榮校注『徐霞客遊記校注』雲南人民出版社、一九八五年

曹文趣・応守岩・崔富章選注『両浙遊記選』浙江古籍出版社、

一九八七年

朱惠榮等訳注『徐霞客遊記全訳』貴州人民出版社、一九九七年

許尚枢・徐永恩選注『天台山遊記選注』西安地圖出版社、二〇〇四年

朱復融訳注『徐霞客遊記』（中国古典名著訳注選書）広州出版社、二〇〇

〇八年

湯化・郭丹注評『徐霞客遊記』（歴代名著精選集）鳳凰出版社、二〇〇

九年

●地図類

清宗源瀚等撰『浙江省輿圖水陸道里記』輿圖総局、一八九四年

陸軍参謀本部陸地測量部「五万分一圖」

「寧海縣城」南支那五万分一圖台州四十五圖

「華頂山」南支那五万分一圖台州